

近代高山の料亭建築と 大工・施工業者について

—料亭洲さきを事例として—

はじめに 料亭洲さき（以下、洲さき）の位置する高山市街地は明治から昭和初期までの町家が多く残り、各時代の変化をうかがうことができる。市内には国指定重要文化財の日下部家住宅や吉島家住宅、松本家住宅をはじめ、伝統的町家が多く残る。加えて、街道筋に展開した旧城下町の町人地は伝統的な町並を良く留め、これまで高山市三町と下二之町大新町の2地区が重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。これら伝統的な町家に加え、近代の発展をものがたる洋風意匠の近代和風建築や近代建築も残り、重層的な歴史空間を形成している。

洲さきの敷地は高山市三町重要伝統的建造物群保存地区内の最南端に位置する。伝統的な表構を残す主屋は、平成21年（2009）に高山市有形文化財に指定されている（図33）。洲さきの建物群の建築的価値や意匠的特質をさらに追求し、今後の保存・活用に向けての基礎資料の作成を目的として、2019年度に高山市が奈文研に委託して調査を実施した。本論考は調査成果の一部を報告する。

洲さきの既往調査と現況 洲さきの建物群は町並保存対策調査や高山市史編纂に際しての調査、岐阜県近代和風建築総合調査において調査されている¹⁾。敷地には北正面に主屋と調理場棟が建ち、主屋背面には客席である客間棟、敷地背面には土蔵群が建つ（図34）。主屋は江戸時代の表構を良く留め、客席である客間棟は床構えなど、数寄屋建築の特徴をよく表す近代和風建築である。洲さきは現役で営業をおこなっており、「宗和流本膳」という高山の伝統的な本膳料理を提供している。



図33 洲さき主屋外観

洲さき建物群の建築年代 本調査では、洲さきの建物群は以下の建築年代であることがあきらかとなった。まず主屋は、棟札にある寛政6年（1794）の建築で、明治初期には屋根を切り上げるなど大規模な改築がおこなわれ、昭和初期頃には江戸時代の表構を留めつつ、現在の形式に改められた。客間棟は大正末から昭和初期の建築で、後述の洲岬家所蔵文書からもあきらかである。敷地背面の土蔵群は東のオオキイクラが大正2年（1913）に現在地に移築され、その他2棟の土蔵は昭和初期の客間棟建設時と同時期の建築と考えられる。つまり、洲さきの建物群は大正末から昭和初期に画期を迎え、現在もその形式を良く留めていることがあきらかとなった。

設計者と大工 高山の宮大工であった八野忠次郎によれば、大正末から昭和初期の改築では、設計監督は大文酒造店の当主の小森春雄であるという²⁾。詳細は不明ながらも、小森春雄は建築の専門家ではなく、高山の博学多識の文化人であったといい、建設に際して京都へ視察に赴いた記録が残る。大工および関連の施工業者に関しては、洲岬家所蔵の「昭和四年九月裏二階離座敷造作並ニ物置キ土蔵 應接 屋根換 庭垣 諸事記」（以下、「昭和四年諸事記」）に詳しく記される。大工は笠原喜助、喜代三（本名は喜代蔵）³⁾、与三吉が頻繁に記される。高山の大工で笠原といえば、江戸時代の御用大工筆頭であり、芳国舎浪草製陶所（明治12年〔1879〕、高山市指定有形民俗文化財）を手掛け、幕末から明治初頭にかけて活躍した笠原甚七があげられる。笠原喜助らは、笠原甚七の兄である笠原喜七の子孫にあたる（図35）。高山町役場（現市政記念館、明治28年〔1895〕）など、高山の近代建築を数多く手がけた坂下甚吉（8代）は笠原甚七の弟子である。

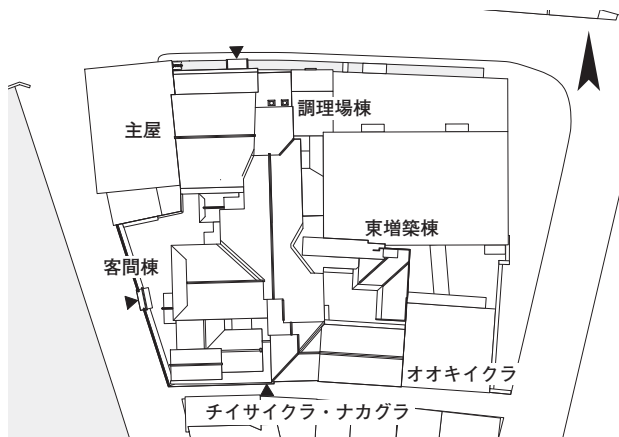


図34 洲さき配置図 1:1000

